

平成十六年度 札幌光星中学校入学試験問題 国語

注意事項

- 一、 試験時間は、四十五分間です。
- 二、 開始の合図により、始めて下さい。
- 三、 印刷が不明な場合のほかは、問題についての質問は受けません。
- 四、 解答は、すべて解答用紙に記入して下さい。
- 五、 試験終了後は、解答用紙回収が終わるまで、席を立たず、静かにして下さい。

問題一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

大人だってこれまで満足な（A）を送ってきたとは限りません。でも、ささやかでも自分がこれまで経てきた体験を通して、¹ いちばん自分にとって大切なことを子どもに語りついでいってほしいとぼくは思っています。同じ人としての土俵の上で、夢をぶつけ合い、信念を語り合いたいと思うのです。

生命はかけがえないもので、どう転んでも人生はたった一度だけであり、そして人類と同じように価値ある生命が自然界に満ち、それらが密接にありとあらゆる形で相互に生かし合っていること、また地球は人類はもろろんのこと、生物にとって絶対不可欠の星であることを熱意をもって、幼い時から語りかけていきたいと思えます。

こんなことは、わかり切ったことかもしれませんが、² このあたりまえなことへの感動を、何度でも呼びさまさねばならないのは、ぼくたち大人自身だろうと思われまます。

幼いころから（B）の大切さ、生物をいたわる心を持つための教育が徹底すれば、子どもをめぐる現在のそのような悲惨な事態は解消していくだろうと信じます。

今、ここから始めればいいのです。ただ、繰り返しますが、³ そのためには「豊かな自然」が残されていなければなりません。自然というものは人の心を癒やす不思議な力を⁴ 宿していて、自然こそ、子どもにとっては最高の教師だとぼくは思います。生命あるものの素晴らしさも、またどんな生き物にもかならず訪れる死についても、自然のふところでのびのびと遊びながら、子どもたちは体で知っていくことになるのです。むろん、自然界の残酷な面をも目撃することになるし、ときには子ども自身、小さな生き物たちに残酷な仕打ちをして遊ぶことだってあります。

へびのシッポを地面にたたきつけたたり、昆虫をちぎったり、カエルに息を吹き込んで破裂させたり。でもそれは、同じ生命あるものとして生きていく予行演習のようなものでしょう。そこでさまざまな生き物たちの死と生に出会って、生きることの喜びの裏側にある悲しみも、知らず知らず体の奥のほうで理解していくのです。

昔、⁵ 自分の家のすぐそばにある原っぱで、くり広げられる小さな地獄の数々はそれでも^{*1} タフに生き抜くことの（C）を教えてくださいました。

デパートで昆虫を買うなんて、とても考えられないこと。トンボが群れ、セミが啼き、川には魚が泳いでいた自然―それは、ぼくらの日常そのもので、虫も鳥も子どもも共存していた世界でした。

自然というものを「思い出」としてさえ持っていない子どもたちに、他人の痛みや生命の大切さを⁶ 説くのは、ひどくむずかしいのではないのでしょうか。

最近、とくに異分子を排除しようとする傾向が、子どものいじめの中に見られると、いいます。自分たちとちよつと違って見える子をいじめの標的にするとか。それはそのまま大人の社会の鏡のようなものだと思いますが、いじめられる側は、たまったものではない。体験者のぼくが言うんだから間違いありません。

『三つ目がとおる』というマンガでは、写楽という名の男の子を主人公にしましたが、この子はなんと目が三つあって、⁷ 額にある第三の目にペタンとパツ印にバンソウコウを貼って隠しています。ふだんは弱虫泣き虫のいじめられっ子ですが、バンソウコウを取って第三の目が開くと、がぜん、ふしぎな力を発揮しはじめる、という設定です。

ぼくはけっこう^{*2} コンプレックスを抱えた人間なのです。そのコンプレックスに居場所を与えてやろうとがんばったのが、このマンガの原動力なのだという気がしています。

「ダメな子」とか、「わるい子」なんて子どもは、ひとりだっていないのです。もし、そんな^{*3} レッテルのついた子どもがいるとしたら、それはもう、その子たちをそんなふうに見ることしかできない大人たちの（D）が貧しいのだ、ときっぱり言うことができると思います。

一見、大人の目から見てもダメに見える子どもの中にも、大人に眼力がないために埋もれたままになっている何かかならずあるはずで。

ひとりひとりの子どもたちの、⁸ 内部に眠っている宝のような何かが届く大人の眼差しがいま、求められているのではないのでしょうか。

子どもたちは他者を傷つけ、自分たちも^{*4} 満身創痍になりながら、救いを求めているのだと思われてなりません。

その叫び声は、何だか地球の悲鳴と重なって聞こえてくるような気さえしています。

子どもたちが、大きな夢を、しっかりと地球の大地を踏みしめて、宇宙へとはばたかせることができるように、ぼくたち大人は力をふりしぼらなくてはなりません。

（手塚治虫『ガラスの地球を救え』）

- *1 タフければ強いこと
- *2 コンプレックスは他人に比べ、自分はおどっていると思う意識
- *3 レッテルは決めつけられた見方
- *4 満身創痍は体中きずだらけなこと

問一 —— 線4「宿して」・6「説く」・7「額」の読みをひらがなで書きなさい。

問二 (A) (B) (C) (D) に入れるのにもっともふさわしいものを次の中からそれぞれ一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 精神
- イ 生命
- ウ 人生
- エ 喜び

問三 —— 線1「いちばん」はどこにかかっていますか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 自分にとって
- イ 大切なことを
- ウ 語りついでいってほしいと
- エ 思っています

問四 —— 線2「このあたりまえなこと」とはどういうことですか。それを示す部分を本文中からぬき出し、初めと終わりの四字で答えなさい。

問五 —— 線3「そのためには『豊かな自然』が残されていなければならない」とありますが、それはなぜですか。次の二つの語句をもちいて、七十字以上八十字以内で答えなさい。

- (語句) 教師 悲しみ

問六 —— 線5「自分の家のすぐそばにある原っぱで、くり広げられる小さな地獄の数々」を具体的に示す一文を本文中からぬき出し、初めの四字で答えなさい。

問七 —— 線8「内部に眠っている宝のような何か」を言いかえた部分を本文中から五字以内でぬき出しなさい。

問題二 次の1〜5の (A) ・ (B) には共通する身体の一部を表す語が入ります。それぞれ漢字一字で答えなさい。

- 1 (A) が高い
(B) をあかす
- 2 (A) が固い
(B) がすべる
- 3 (A) を借りる
(B) に刻む
- 4 (A) がかかる
(B) が出ない
- 5 (A) が立つ
(B) を決める

問題三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「どうしたんや、オキヤン」

「なんや、起きてきたんか。危ないぞ、早く家へ戻って寝とれ」

兄は怖い顔をして睨みつけた。お父さんは鶏小屋の金網をつくろっている。

「狐が鶏を襲ったんだよ。もうすこしで金網を破られて全滅するところだった」

お父さんの横には、白い毛のかたまりがころがって、月の光にぼうつと浮かびあがっている。

「うん。ぼく見たよ。」¹ 白と黄色が混じったやつが、稲光のように藪の中を走っていったもの」

「うそいうな。狐はとつくに逃げてしまったし、こんな暗い藪の中では、そんなもの見えるはずがないやないか」

オキヤンは小声で、² なじるように強きう。

「けど、ほんまに見えたもの。うそやないよ」

「あほう。ねぼけとんのやる。ねぼけとると、鼻に目の玉をくりぬかれるぞ」

ぼくはぎよつとして、思わず両手で目をふさいだ。³ 二人はひそひそと小さい声で話していた。なにも小声でいう⁴ ヒツヨウ

はちつともなかったのに、まるで秘密の場所で見たとときのようように緊張し、声を落としていた。

「さあ早く寝なさい。風邪を引くから」

おだやかなお父さんの声が、ほつとした安らぎをあたえてくれた。^{*}1 榎が、^{*}2 大入道のように黒々と、藪の上におお

かぶさっている。突然その巨大なかたまりがふくれあがり、大きな手を出して、つかみかかってくるような気がした。かみ裂か

れた鶏の首から、赤黒い血がしたたり、白い毛を染めていた。ぼくは急に怖くなり、部屋にとびこんで、寝床にもぐりこんだ。

耳がキーンと鳴り、狐の声と鶏の悲鳴が、頭の中で小さな爆発を起こしていた。

翌日、ぼくはなにするとなく、裏庭にいた。日向ぼっこをしたり、土の中にいる小さな甲虫を集めて、土を掘った穴にいれ、

石ころで家をつくったり、落ちている^{*}3 熱柿にたかっている蜂に、石を投げたりしていた。鶏たちは、昨夜のさわぎも忘れて、

コッコッーと鳴きながら、仲よく餌を食べている。

ぼくの心の底には、大榎の下のお稲荷さんと、狐の洞穴のことが、重くのしかかっている。榎の上に、太陽がさしかかる。小

暗い藪の中に、明るい木洩れ陽が、繊細な竹の枝の模様を織りこんで、美しい明暗の世界をつくっている。ぼくは台所へ走って

いき、油揚げを探す。油揚げが見つからないので、そのかわりにひろす（がんもどき）を一つもって、裏へ走り戻り、竹藪へ入って

いく。

竹藪はいい遊び場だったが、榎の大木の下までは、行ったことがなかった。そこにはなにかしら近づきたいぶきみさがあっ

て、いつも遠くから、小さな祠を眺めているだけだった。枯れ笹を踏んで、ぼくはお稲荷さんに近づく。⁵ ツみあげた石の上に、

小さな社があり、古びたしめなわが、屋根からたれ下がっている。青黒い苔がびっしり生えた石の上に、白い皿にのせて、新し

い油揚げが置いてあった。ぼくはちよつとためらったあと、油揚げをとり、遠くへかっぱい投げ、かわりにひろすをおく。お婆さ

んには悪かったけれど、⁶ 今晚はどうしてもおいしいひろすを、狐に食べてはしかなかったのである。

祠と榎のまわりを、ゆつくりとまわってみる。だが、狐の穴らしいものは見つからない。榎の大きな根が高くもりあがり、黒

い凹みをつくっていたが、クモの巣がはりめぐらされていて、けものが入り込んでいるようすはなかった。

じめじめした枯れ笹の上で、ぼくはしばらく⁷ たたずんでいた。きつと、どこかに狐の穴があるのだろう。枯れ笹で、うまく

入り口をかくしているのかもしれない。狐は夜活動するのだから、昼は狐にとつては、人間の夜のようなものだ。だから、昼は、

きつと戸じまりを⁸ ゲンジュウにして、だれも入ってこないように用心しているのだろう。

夕方になると、そつと穴の入り口の扉があき、狐の親子が顔を出す。そして、かわいい銀や金色の子狐たちが、枯れ笹の上を

走りまわって遊ぶのだ。昨夜見た、闇の中を走るきらめくようなしなま模様を思い浮かべた。胸がどきどきするような、妖しい美

しさ。⁹ オキヤンはあんなにいうけれど、あれはどうあつても、狐にちがいがなかった。あいつは、ぼくにだけ姿を見せてくれた

にちがいない。

夕食のとき、ひろすが一つたりない、とお母さんが（ A ）。

「狐がとつていったんとちがうやるか」

「あほなこといいなさんな。真つ昼間、台所に狐があがってきたりしますか」

「けど、きつと狐が食べたんだと思うよ。ぼくは知ってるもん」

「お前やる。ひろすをつまみ食いしたのは……」

お母さんはネギをきざみながら、（ C ）。

「うーんと、ちがうちがう。ぼくとはちがう」

お父さんの大好物のひろすを、一つちよろまかしたのは悪かったが、きつと、狐はめずらしい御馳走に、舌づつみを打ってい

ることだろう。ぼくは、その日一日中、（ D ）。

（河合雅雄『裏藪の生き物たち』）

- *1 榎Ⅱニレ科の木
- *2 大入道Ⅱ背の高い化け物
- *3 熟柿Ⅱ熟れた柿

問一 —— 線4「ヒツヨウ」・5「ツみあげた」・8「ゲンジュウ」を漢字で書きなさい。

問二 —— 線2「なじるように」・7「たたずんでいた」の意味としてもっともふさわしいものを次の中からそれぞれ一つ選んで、記号で答えなさい。

2「なじるように」 7「たたずんでいた」

ア 責めるように ア 見つめていた

イ ばかにするように イ 考えていた

ウ 疑うように ウ 立ち止まっていた

エ 教えるように エ 座りこんでいた

問三 (A) (D) に入れるのにもっともふさわしいものを次の中からそれぞれ一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 小さく笑う イ ぼやいた ウ へんに浮き浮きしていた エ 横目でにらんだ

問四 —— 線1「白と黄色が混じったやつが、稲光のように藪の中を走っていった」様子を、同じようにたとえを用いていかえた部分を本文中から二十字以内でぬき出し、初めと終わりの四字で答えなさい。

問五 —— 線3「二人」とはだれとだれですか。本文中からそれぞれぬき出しなさい。

問六 —— 線6「今晚はどうしてもおいしいひろすを、狐に食べてはしかったのである」とありますが、それはなぜですか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 昨夜、狐が鶏を襲った様子を思い出して、もうあんなことをしてほしくなかったから。

イ ふだんは気味の悪いお稲荷さんに近づいたので、何かをしないとまずい気がしたから。

ウ 榎の木の下には、本当に狐の親子がいるのかどうかを、この目で確かめたかったから。

エ 昨日の夜、狐はぼくにだけ姿をあらわしてくれたと思いい、強いつながりを感じたから。

問七 —— 線9「オキヤンはあるにいな」とありますが、オキヤンがいったのはどういうことですか。二十字以内で答えなさい。

問八 この文章は大きく三つの段落に分けられます。第二段落・第三段落の初めの四字を本文中からぬき出しなさい。